

第12期 第3回 府中市美術館運営協議会 会議録

- 日 時 令和6年2月10日（土）午後2時～午後4時
- 会 場 府中市美術館 会議室
- 出席者 橋本会長、隠岐副会長、芹澤委員、岡村委員、真住委員、水橋委員、金田委員、吉田委員、瑞慶覧委員、森下委員
- 欠席者 高橋委員、加賀美委員
- 事務局 藪野館長、鎌田副館長、大木副館長補佐、尾崎管理係長、神山学芸係長、志賀主任学芸員、小林管理係員
- 傍聴者 なし
- 議 題 (1) 諮問事項「府中市美術館の利用拡大 事業・施設のあり方」について  
(2) その他
- 配付資料 「第1回・第2回 府中市美術館運営協議会 意見抽出」

■発言内容

事務局：

府中市美術館副館長の鎌田です。本日はお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。高橋委員、加賀美委員は本日所用により欠席ということですので、会議を始めます。

12名の委員の方のうち、10名の方にご出席いただいております。メンバーの過半数を超えておりますので、会議が成立していることをご報告いたします。

本日の資料は、事前に送付した本日の会議次第、「第1回・第2回運営協議会意見抽出」、そして昨年7月に開催しました第2回運営協議会の会議録（案）の3点です。未着等でお手元に本日の資料ない方、いらっしゃいますでしょうか。

本日は、第12期府中市美術館運営協議会の第3回の会議となります。午後4時には終了したいと考えております。次第に沿って進めてまいりますので、よろしく願いいたします。

それでは、次第の2、運営協議会会長挨拶を橋本会長よりお願いいたします。

(会長挨拶)

事務局：

ありがとうございました。

続きまして、次第3、館長挨拶を、藪野館長お願いします。

(館長挨拶)

事務局：

それでは、次第4の議題に移ります。ここからの議事は、会長にお願いいたします。

会長：

まず、本日は傍聴の方、いらっしゃらないということです。

前回の議事録については、特に皆さんからご意見がなく、事務局のほうも修正もないということですので、これで会議録を確定して、府中市の市政情報公開室とか中央図書館、市のホームページで公開していくこととなりますので、よろしく願いいたします。

それでは、まず議題の1で、諮問事項「府中市美術館の利用拡大、事業・施設のあり方について」です。事務局から資料内容について説明をお願いします。

事務局：

前回に引き続き、今回の会議でも、府中市美術館の利用拡大について、皆様からのご意見をいただきたく存じます。

お手元の資料は、令和5年2月5日の第1回及び7月30日の第2回の会議において、皆様からいただいた意見をまとめたものです。

内容によって、①今回の答申事項に関わる議論の方向性に関するもの、続いて、②前提となる府中市美術館の現在のイメージや事業内容に触れたもの、③府中市美術館にとどまらず、美術館全般に対して皆様が抱えている期待や美術館の意義に関わるもの、④今後の府中市美術館に求めるものや改善点、の4つに類別しました。

②にありますように、府中市美術館の現状に対しては、非常に高い評価をいただいております。その上で、今回の諮問事項にある利用拡大と考えていただくなれば、一方に、③のような理想の美術館像を思い浮かべていただき、その上で④のように、そこに向かうための方策や具体案を挙げていただくことになろうかと存じます。以上です。

会長：

今、ご説明いただきました。今日の会議のベースになるのは、この資料にある第1回、2回運営協議会の意見抽出です。簡単におさらいをしましょう。前回の記憶もちよっと遠のいているかもしれないので。①から順番に見ていきます。

(会長が資料の①～④の各項目を読み上げながら説明を行う)

これまでの議論で、かなり多岐にわたってご意見を既にいただいているかと思います。前回のおさらいをして記憶が少し戻ったところで、新しい、ここにはないという視点でも結構ですし、新たなお話やお考えがあれば、ぜひご発言をお願いします。

委員：

前回までの議論の中で気になっていたことを。美術館では「来場者」という言い方をします。来てくださる方を中心に色々なことが考えられているという。それはどこの美術館もそうだと思いますが、コロナ禍で来られなくなった。その時、特に私の館は常設のコレクションがないものですから、本当にただの箱なんですよ。お客さんが来てくれないと、うちは死んだ施設なんだな、というのをすごく実感しました。美術館に来てもらわなければ「生きている美術館」とは言えないのだな、と実感したのと同時に、オンラインの方法がたくさん開発されて、美術館には来られ

ないけれども、美術館に触れることができる、コミュニケーション取ることができる、ということがわかってきた。

特に、障害のある方や、ひきこもりで家から出ることができない方とか、長く患っていて病院から出ることができない方とか、私たちはそういう方々をたぶん見逃していた、ということが逆に露わになったな、ということ。今、色々なテクノロジーを駆使して、遠隔でそういった方とコミュニケーションを取ることができる。

私の美術館の場合だと、例えば特別支援学校の子たちはなかなか来ることができないので、朝9時から10時の開館前の時間帯にオンラインでつないで授業をしたことがあります。あと分身ロボットのオリヒメというのがあるんですけど、それを利用して、自宅や病院などにいる人たちに展示室の中を見せて歩く、ということもしました。

なかなか電波が届きにくくなってしまったり、全て万能にできるわけではないんですけども、講演会もできるだけ手話通訳を入れるようにしたりとか、UDトークのような文字支援でしゃべった言葉が瞬時にモニターに文字化されて見るとか、オリンピックのこともあったので、そういったものもだいぶ取り入れるようになったときに、今までコンタクト、コミュニケーションが取れなかった方というのが随分いるんだな、ということに改めて気がつきました。

ただ、手間もかかりますし、障害を持たれた方にはいろいろセンシティブな背景もあつたりもします。障害だけではなくて、引きこもりや、いろんな社会的な問題を抱えている方、例えば経済的に困窮しているとか、健康けれども美術館に来る余裕がないとか、何かそういう社会的な課題を抱えた人というのもいるので、すぐに何かができるほど簡単な話ではない。

なので例えば、経済的に恵まれていない子どもに勉強を教えているNPOさんや、聴覚障害者の方を支援しているNPOさんなど、そういったところにヒアリングをして、お金で解決するようなものもあれば、我々が汗をかかなきゃいけないこととか、新しくやり方を模索しなきゃいけないこともあります。いきなり全部は無理ですし、ひとつ始めてみるとすぐに次の課題がまた見えてくるので、いちごっこにはなるんですけど、職員のワーク・ライフ・バランスをちゃんと整えた上で、そういったことも開発していくべき時期になっているのかな、と。

逆に言うと、この利用拡大とか課題とかというお話、よく出るんですけど、十分使命としては果たしていらっしゃるなど。何をこの上、足したらいいんだろうと、いつもこういう会議に来るたびに思います。あえて言えば、府中市だけではないんですけども、「美術館に来る人」しか相手にしていなかった、という反省を踏まえた、次のステップというのがあるかな、と。過去2回のお話を踏まえて、出ていなかった意見かと思っております。

会長：

ありがとうございます。他にいかがですか。

委員：

今のお話伺って、本当にコロナ禍で凄く色々な美術のことが変わったな、と思います。私は美術館よりもギャラリー等との繋がりの中で生活しているんですけど、ギャラリーもコロナ禍、本当に経営が大変で。そういう中でオンラインでの絵画の販売に力を入れたり、バーチャル展示みたいにして、ネットでもギャラリーの部屋が見られるようになっていたり。

あと最近は海外のアートフェアで、今、台湾のほうでも展示しているんですけど、子どもがい

ると海外行けないので、全部現地のギャラリーにお任せして作品だけ送って。アートフェア初日のVIPの日にオンライン接続で、フェイスブックライブとかインスタライブとかで、向こうのコレクターさんにつながって、こちらは中国語しゃべれないけど、グーグル翻訳を横に置いて、チャットで絵文字など送れば、何となくコミュニケーションができたりして。現地に行かなくても、私が伝えたいことは何となく伝えられて、そういうシステムがコロナ禍で急速にできていて、それがすごく定着していった。

でも逆にコロナが落ち着いた後に、やっぱり美術館に行って本物を見るっていいよね、とか、ネットでポチポチとお買物ができるようになっても、やっぱりその場に行ってショッピングするのって楽しいよね、というような雰囲気の中で、今、百貨店業界とか旅行業界とか、すごく株価も上がっているんですよ。リアルに戻ってきているのかなっていう流れも感じていて。両方を充実していくことは大事だなと思っています。

オンラインで、ひとつやったら面白いんじゃないかなと思うのが、グーグルアースでルーブル美術館などの中が見られる、あれを府中市美術館もできたら良いですね。今、小学生は1人1台タブレット端末持っているんですけど、結構規制がかかっている、見られるページが少ないんですよ。でも、美術館や図書館など、安全なページは見やすくて、子どもたちはそういうのを結構見ていたりしているんです。休み時間にグーグルアースで、水族館とかいろいろな場所を見て楽しんでいるみたいで。それで美術館の中も見られたら、府中市美術館、こんな中になっているんだ、と興味を持って来る子もいるんじゃないかと。そういうのも取り入れたら面白そうです。

会長：

他にいかがですか。

委員：

コロナ禍の時は美術館に行けなかったもので、皆さん、美術館のサイトを検索してオンラインのイベントに参加したりしました。インターネットを使っていろいろなことができるんだなというのも分かったし、一方で、実際に美術館に足を運ぶことはやっぱりいいよね、というのも分かりました。だから両方からめて、プラスになるような新しいことができるといいなと思います。

利用拡大のことで考えたのは、前回の会議で、商店街のイベントと連携するという話が、商店会の方からありましたけれども、一般市民へのアプローチとして、町会の回覧板を利用するというのはどうでしょうか。府中市は回覧板が普及しているのです。うちは東京外大が近いのですが、東京外大は無料で海外の映画の上映イベントをやっていて、毎回、回覧板にチラシが入ってくるんです。行ってみると300人ぐらい来ていて、近くの方、年配の方、土曜日の午後とかなので、集客がすごくいい。市内全域にチラシを入れることができるかは分かりませんが、一部の町会だけでも入れてあげると、けっこう反応があるんじゃないかと思っています。せっかくきれいなチラシをつくっているのです。

そういう文化的なものに興味のある市民は多いので、機会があれば行ってみようと思っている方を取り込めるんじゃないかと。ネットも含めて、いろんな仕掛けをやっていく。まだまだできることはあるのかなと思います。

会長：

ありがとうございます。他にいかがですか。

委員：

今日は今期の答申書に申し上げる最後の機会ですし、私の任期も終わりますので、3点ほどお伝えしたいと思っております。

私たちの今年の活動は、美術館ですと「芸術文化祭」の「洋画会展」の講評会のお手伝いや、幼稚園生の「お散歩美術館」もまたお手伝いする予定ですが、市民活動の機会はずいぶん減りました。美術館が市民と行うプログラムも、コロナで減ったあと、なかなか戻らないようで、残念に思っています。

そこでこれから再開されるボランティア活動へのお願いですが、「お金のかからない作業委託」というような内容ではなくて、美術館と、市民で、楽しめるような、「市民も楽しめる、美術館への協力作業」のようなものが、発展していくことを願います。

2つ目は、作品購入についてです。「美術館がいつまでも市民のための美術館であってほしい」と願うわけですが、その基礎はやはり作品だと思います。これまで申し上げてきたような、なにか目標を掲げた収集を続けていただきたいです。「100年コレクション」。100年で何か目標達成するんだ！といったような視点があると、継続的に収集も進むのではないのでしょうか。素人が言うことではないかもしれませんが。その目標達成までの予算や基金も持続可能になる気がします。そうやってこれまでのコレクションをさらに充実させて、市民の精神的財産を積みあげていってほしいと思います。

3つ目は展覧会についてです。ここでは、内容も作品サイズも点数も、都内で開催される展覧会とは違ったおもむきで、市民が「あー美術が生活の中にあるってイイな、美術館のある暮らしは素晴らしいな」、と気づかされるような、展示をしていただきたいと思っております。入館者数にとらわれることなく、市民にそんなふうに喜ばれるものを。です。

それは流行りものを扱うとかいうことではなく、美術の良さに気づき、府中市美術館の鑑賞を通じて、よその美術館にも足を運びたいような市民を、多く生み出すような、そんな美術館にしていきたいです。

そして、もう一つ。作品と市民が会える空間も大事にしてほしいです。施設もそうですが、監視や受付の人たちの態度や受け答えは印象を大きく左右して、とても大事です。いつか予算が下がっていったら、受付が自動販売機になってしまうのを想像すると、本当に寂しくなります。笑顔で迎え入れられ、笑顔で送り出される心地よさ。ちょっとでも人と話した好ましい記憶は、美術鑑賞の締めくくりに、とても大事なものだと思っています。

長くなりましたけれども、そのようなアットホームで、柔らかな、市民のための美術館運営であってほしいです。どうぞよろしく申し上げます。

会長：

ありがとうございます。まずは順番にお話を伺っていきます。いかがですか。

委員：

学校関係者ということでお話をさせていただきます。市の連合の図工美術展、会場提供していただいているので、今こちらに来る前に見てきたのですけれど、毎年やっていることを

地道に続けていく、というのがひとつ大事な部分なんだろうな、と改めて思いました。たぶん、作品が展示されているどこかの学校のご家族らしき方々が何人もいらっしやっている感じでしたので、そういう学校の作品を展示する場を提供していただいて、地道に継続しながら、またそれを保護者の家庭にアピールしていくということも、利用者の拡大という点ではあまり大きく変わらないかもしれませんが、大事にしていかなければならないと思いますし、また美術館の側としても大事にしていただけるとありがたいな、と改めて思ったところです。

先ほどオンラインの話の中で、タブレットの話が出ていましたけれど、今、コロナで国のギガスクール構想というのが急ピッチで進みましたので、小学生、中学生は公費でタブレットを1台持っています。高校生も、家庭の自己負担ですが持っている状況ですので、我々教員もタブレットの利用技術を高めることが求められているところです。美術に限らず、全部の教科でとにかくそれを有効に活用することが求められていて、実際、子どもたちにもそういう意識が浸透してきていますので、思いのほか、結構小学生でもタブレットを使いこなすんですね、小学生の低学年でも。ですので、タブレットを有効に活用していくというのは将来的に非常に有効な手段になっていくだろう、と考えています。

それと話は変わりますが、先日、市役所の新庁舎の会議室に行くと、絵が飾ってあったんです。それが本物の絵なのか、複製の絵なのか、分からないのですが・・・市の美術館があるということが、こんなところにも生きている、影響が出ているのかもしれない、と。会議室に飾ってある一枚の絵を見て、そんなことを思いました。

会長：

ありがとうございます。他にどうですか。

委員：

教育の連携の話が以前に出ていましたが、小学生は展覧会に行きますね。中学生も、私の子どもが通っている中学校では、大体夏休みに美術館に1回行って、感想を書いてきましょう、という宿題が出るんです。

でも、夏休みはどうしても小さい子ども向けの、「ぱれたん」などの展示があって、きっとよく見れば、もちろん大きい子でもいろいろ考えてみれば、生きるものもあると思うんですけども、ちょっと中学生には、ぱっと見、つまらないと思われがちで、それは少々残念だなとも思います。中学生には、宿題で見てきてね、というだけではなくて、何かもう一步踏み込んだ学校連携があるといいな、と思います。

会長：

例えばどんなことが中学生に対してあったら良いですかね。

委員：

例えば絵画を見るにしても、小学生と中学生では同じものを見ても全く違った感想が出てくると思うんです。美術の先生は専門家なので、ちゃんと見て、その感想を書いて、というのが、先生にはきっとできるんでしょうけど、子どもたちにはなかなか難しい。ふだんから美術に接していないと難しいと思います。ただ実際どんな方法が良いのか分からないのですが・・・

委員：

ばれたんの展示は隔年なんですよ。子ども向けの展覧会、いつも夏休みの時期にやっていて、去年はもう少し中学生っぽい展示をやっていたはず。それが私の小学生の娘にとっては難しかったというか、ばれたん展ほど楽しくなかったと言っていて。それならちょうど良い塩梅のところ、ばれたんばい要素と、もう少し高度な中高生向けの美術展の、両方の中間ぐらいのところ、毎年開催しても良いのかもしれないですね。

副会長：

ばれたん展でも、展示作品は意外と、本当にきちんとしたものですね。ただそれにクイズなどがあると、そのクイズにばかり集中してしまいがちになる。やはり導入のさせ方というか、さっきアバターみたいなもので見せるというお話もありましたけれど、いずれにしても、空間を画面で見せるだけで良いのか、例えばそれをきちんと見たい、というときに、作品に寄っていきけるかどうか。そこまで自動でできる機械ってほとんどないと思うんですよ。だから、カメラマンみたいな人がいて、それを見せるかとか。

それから、作品を選んでクリックすると、その作品に関する画像が出てきて、ちょっと短い解説みたいなものがアナウンスで流れる、あるいは文字でも流れる、というようなシステムがあると、遠隔でも作品を見た気になると思うんです。

海外ではコンフェランシエールというシステムがありまして、ほとんどボランティアなんです。美術に関心の高い方に集まっていただいて、それぞれに専門があって、概略の解説みたいなことをしてもらいます。お金がかからなくても、何かそういうことができると思います。

私はやはり美術関係者なので、行くといつ絵の前でおしゃべりして、何度も「静かにしてください」と怒られたことがあります。でも美術館ってそんな黙々と見るものなのかな、と。静かに見るのもいいけど、「今日は自由にしゃべりながら見てもいいですよ」というふうに言ってもらえると、こちらとしてはすごく楽なんだけど・・・と思うことがあります。

それに対して文句を言う鑑賞者がいるのもわかるので、もう少しニーズに合わせた形で、たとえば幼稚園向きの解説する人がいる時間帯はここです、とか、それに合わせて予約ができるような、そんなシステムがあると良いですね。

会長：

そうなんです。色々な人が、不特定多数の人が時間を選ばずに一つの場所に集まるから、なかなかうまくいかないことがある。

他にどうですか。

委員：

去年の春に私の展示が千葉市美術館であったので、千葉市まで通っていたんです。同時期に三沢厚彦さんが展覧会をやっていたらして。私のワークショップに来てくれた小学6年生の男の子が三沢さんの展示も見たようで、ちょうど三沢さんが私の制作場所に来て私と話していたら、その少年が来て、今見てきました、カメラが一番好きでした、と。三沢さんに何か描いてもらえるよと言って、描いてもらったら本当に顔真っ赤になっちゃってすごく喜んでいて。ドキドキしてた

んだらうなっていうのが手に取るように伝わってきました。

どうしてもワークショップや鑑賞会は堅苦しくなっていくので、もう少し生っぽい何か、例えば1時間、作家とコレクションを回る、というようなイベントがあると、より身近に感じられるのかな、と思いました。

府中市美術館には公開制作もあるので、これが一番生々しいし、作っているほうはやりづらさもあるのですが、それとはまた違う、もっと作家と接する目的のイベントがあっても面白そうです。若い作家も私の周りにたくさんいるので、そういう人たちと美術を語り合う、みたいなことが当たり前になっていくと面白いな、と、皆さんのお話を聞いて考えました。

副会長：

現在活動されている作家さんとお話できるのは良いですね。直接来ていただかなくても、ZOOMなどを使う方法もありますね。

委員：

オンラインの話でいえば、大学で、コロナ禍で授業が成り立たなかった時、例えば彫刻科では学生に石を配って、みんなそれぞれ自宅アパートで制作して、ものすごく工夫をして、大学も頑張って課題をつくっていました。

留学生の人、中国・台湾・韓国の方などが入国できなくて、それで1年半ぐらい、足止めを食っているような状態というのがあって。そのとき中国にいた学生が、ドローイングをオンラインでも中継したんですけど、それが、自宅の窓から外の洗濯物、遠くに洗濯物を干している状態が実際に見えていて、とか、その地では当たり前の景色と繋げて描いていて。そういうことも含めて作品として展開させることがオンラインでは可能になるんですよ。堅く考えないで、今ここにあるものを使って何か作ろう、というのもできるかな、と思います。

もう一つ、府中市に広報板というものがあって、美術館のチラシが時々貼ってあることもあるんですが、私の近所では貼られていないことが多いです。コンサート等のチラシはA4ぐらいのチラシがちゃんと貼ってあるんですけど、美術館のものはあまり貼られていない気がします。

会長：

ありがとうございます。他にいかがですか。

委員：

今日も美術館の中、見せていただいて、企画展はすごく質の高い現代美術をやっているし、一方で、市民ギャラリーでは子どもたちの展示があり、公開制作もあり、「拡大」って、これ以上何やるんだらう、というくらい充実した美術館活動をされているので、私が何か言えることはあるかな、と思っていたんですが、最近私の美術館の近くで始まっているプロジェクトが、これからの美術の在り方についてすごく考えさせるものだったので、お話しします。

美術館という器の中だけで美術が行われている、ということではなくて、その外側にどう開いていくかというのは、すごく重要だと思います。その教育普及の対象として、どうしても子どもたちが思い浮かびやすいんですが、それだけではない例として、最近私の美術館の近くの高齢者デイサービスが、アーティストのレジデンス活動を始めたんです。それにうちの美術館も協力す

ることになって。作家さんは公募制でやっているんですけど、レジデンス中に美術館に来て、中の展示を自由に見れるようにして、館のほうで企画展する作家さんも、レジデンス施設が空いているときは泊めていただくなど、連携しているんです。それで私も初めてデイサービスへ行ったら、とてもクリエイティブな日常がそこで展開されていて。

クリエイティブといっても、質の高いものを目指す、という話ではないんですけれども、歌って、踊って、塗り絵をして、というのが日常の中で行われていて。ただ子どもたちと違うのは、子どもたちはできることがどんどん増えていくだけけれども、逆に昨日までできていたことが少しずつできなくなっていく人たち、どのように人生の終末をこれから迎えていくのかという課題の中で、それがほんの少し豊かになるような、そういう日常が繰り広げられていて、そこに若い作家さんが織り込まれて、まずアイデンティティクライシスが起きると。それが非常に面白いんです。外国にレジデンスするよりも、自分を見失う、というようなことを言う作家さんもいます。そのデイサービスはすごくリテラシーの高い、アートも専門的に学んでいる施設長がいらっしやあって。そこでレジデンスをしたからといって、アートが福祉に奉仕するのでもなく、一方でそれを搾取するのでもなく、極端に言えば何もつくらなくても良い。それでもアーティストというのは物をつくる人たちなんですけれども、そこで一緒に時間を過ごし、そこで考えたことがその後に活動に生きていくような、そういう体験ができればいい、ということでやっていて、これはすごいな、と思いながら見えています。

若い作家にとって、自分も含めこれから先、誰もが必ず迎えるであろう、だけど、ふだんなかなか見ることができないであろう、リアルな日常を見ることというのは、イメージとして自分が年を重ねていった先、どういうふう生きていくか、ということを考える機会になるし、デイサービスを利用されている方にとっても、パフォーマンスや、音楽や、アートをやるんです、という若くエネルギー豊かなアーティストたちと一緒に話ができる。

本当にたわいない日常の話かもしれないけれども、最後レジデンスが終わって、お別れの挨拶をするときに、私はこういうことをこれからやりたいんですっていうようなことを語って、みんながその背中を押してあげるような関係性がそこで生まれている、ということに、とても私は衝撃を受けて。

舞台監督による公演企画も行われたのですが、デイサービスに通っている方たちに何かを仕込むのではなくて、ふだんの日常の状態の中に観客席をつくって、ご家族や興味のある方をお招きして、そこで日常で行われていることをパフォーマンスアーティストたちが最大限に盛り上げてくれる。車椅子でほとんど動けなくなって指先がやっと動くような方の指の振動を、手をつなぎながら、それを全身のパフォーマンスまで拡大させていくようなダンスを披露するとか、逆に市の劇場にデイサービスの日常を持って行って、舞台の上で日常を繰り広げる、という試みもされていきました。

アートとケアの問題、最近非常によく言われているけども、こういう形で何かこれから高齢社会へ向かっていく時代の中で、まだまだアートにもできること、社会と関わりを持つことの可能性はあるんだなと考えさせられたんです。それはもちろん色々なハードルもあるし、簡単にすぐやりましょうと行ってできることではないかもしれないけれども、アートの役割として今後可能性が考えられたら、すごく豊かな変化が起きるのではないかなと思っています。

会長：

そのイベントは施設長さんが芸術集団にコンタクトを取って実現したのですか。

委員：

デイサービスの施設と、それとは別にアート支援の事業をやっている団体があって、そこが連携して事業を立ち上げているんです。助成金を取ったりしていて、レジデンスはその助成金を活用しながらやっているんですけども、その施設長さんが地元の病院の娘さんで、もともとアートの勉強をしていたんだけど、家業を継ぐために戻ってきて、家業と自分が学んできたことを結びつけて、アートとケアの両立というのを考えたようです。

館長：

「終末美術」という言い方をしたほうがいいのかもしいんですけど、私の教えていただいた先生が、芸術家の「最期の作品」というのをずっと調べていて、結局、それは未完に終わってしまったんです。その一環として80、90、100歳に近いような方たちと関わる仕事をしたときに、いったい何が原動力となってまだ描こうとするのか、というところがすごく興味ありました。

ゴヤがもう駄目だと言われてから黒い絵を描き始めます。しかも、74歳でもう駄目だって言われたのに82歳まで生きてしまった。ひょっとしたら絵の中とか音楽の中とか、パフォーマンスとかいろんなことの中に、生命付与システムみたいなのが動く、何かがある気がしているで、今の話は非常に興味深かったです。

もう一つ委員がお話になった中で、色々なおしゃべりをしたい人たちを集める、そういう会をやる、という、これはトライアルでもやってみたいと思いました。例えば普通、何曜日の何時だったらできるよ、というのがありますか。

委員：

集める人々によるかとは思いますが、どうでしょう。対象の方との兼ね合いもあるでしょうけれど、若い作家さんだったら、平日でも良いのかもしれないし、でも作家もみんな働いているので、土日が良いのかもしれないです。

館長：

こちらに来ていただく、ということも考えられますけど、こちらが出前で行く、というのもひとつのアイデアですね。

「終末医療」があるように、「終末美術」あるいは「終末表現」というものが課題になっていくと思いました。

副会長：

やはり人がいるわけです。解説するにしても、ネット上で見せるにしても。受ける側は、学芸員さんや、現在いる人間でやろうとすれば、まず働き方改革があるので無理だろう、と。そうすると、本当に美術がお好きで、美術館に足を運べる方にボランティアなどでガイド的な活動をしていただく、というようなシステムができるといいですね。

美術館に来ていただいて何かを制作する、ということはあるわけです。小学生がばれたん展の

時などに、お絵かきしたり塗り絵をしたり。そういうお手伝いをしたい方に集まっていただいて、概要を説明して、シフトをつくって。私なんかも退職した人間ですから、私のような人間の時間を使っていただければ嬉しいです。そういう活動を、ネットで予約を取るような感じでできると良い。

それを学芸員さんたちが人を集めてアレンジして、となると、本当に仕事が増えるばかりなので、「友の会」のような団体が主催するとか、アレンジメントするとか、というシステムが今後できれば良いですね。

現在開催中の白井美穂さんの展覧会、私も拝見しました。つくづく感じたのは、現代美術は私にとって難しいな、と。正直に申しあげると、これのどこが良いのか分からないのですが、ただ時々、あっ、と気づくところがある。今回の場合は解説書があつて、出品リストもあります。どの作品がどの解説なのか、謎解きをするように、見ながらはつきり分かったのもあるし、そうでないものもありました。

確かあれは芸大の展覧会だったか、絵の前に行くスマホで解説が聞けるんです。長々とした解説を、レクチャーをしろと言ってるわけじゃないんですが、特に今回の場合は作者さんの解説文があるから、それをその方の声で、あるいは誰かのアナウンスメントで、これはこういう意図で制作したんですよ、という言葉が聞くことができれば、すごく面白いと思います。

会長：

たくさんのご意見ありがとうございます。

今、ウェブの環境がすごく整ってきている、というのがひとつ話のベースになっているのと、行ける人と来れない人、もう一つ、興味のない人、というのがあります。行きたくない人。行きたくない人・興味のない人の割合って、どんなに頑張ってもそんなに変わらないですよ。

ただ、美術館でのプログラムの仕掛け方が変われば、違った数字になってくるのではないかと、思うところなんですけども、前提として、今のウェブの環境の整備とか、SNSの問題というのはすごく大事で、それを総合的にインタラクティブにできるかどうか、というのも、一つのやり方次第だと思うんです。

一例ですけど、コロナ禍の前に、サマーナイトミュージアムというのを毎年やっていました。夏休みの期間で、本当に電気を消して、懐中電灯で美術館の中を巡るという、ロールプレイングゲームみたいな仕掛けがある中を巡るんですけど、できなくなっちゃったんです、コロナで。それでどうしたかという、まず、私も出演しているんですけど、物語で、怪盗から、何月何日の夜に美術館のお宝を頂く、というドラマ番組をつくるんですよ。ボランティアの人たちが脚本から衣装から全部やって、私は実名の副館長役で「脅迫状ですね」というのをやるんですよ。色々なヒントがドラマの中に隠されていて、ウェブ上で子ども探偵を募集するんです。それで子どもたちが美術館に来ると、あつこの作品が狙われている、というのがちゃんと探検していくと分かるんです。そして、何月何日に予告された夜に、ライブでもう一回ドラマをやるんです。

最後、そのドラマを見終わると、参加している子ども探偵たちがウェブに入ってきて、そこで意見交換をして、という交流の仕組みを考えてやってみたら、これが意外に面白くて。必ず子どもたちは親とか兄弟とか友達とかと美術館に来るわけですから。だから鑑賞も実際にやる。それで最後の答え合わせは、100人とか200人とかウェブで集まる。そういう仕掛けにしたんです。一度美術館に足を運んだ子ども探偵たちは、探偵マークの缶バッジを渡して、次の展覧会ぐらい

まで観覧して良いよ、というようにすると、遊びに来るようになる。

やはり生で見てもらいたいということと、オンラインでやること、この両方をどうするか、それから本当に行けない人をどうするか、という問題です。来られても視覚障害があっても見られない人をどうするか、ということも、もう20年ぐらいやっていますが、これもずっとやり続けなければならない仕事です。聴覚障害については、もう15年ぐらい前からレクチャーは全部手話通訳をつけています。

ところが、聴覚障害の方々、あまり来ないんですよ。ではどうするか、ということで、聴覚障害者の団体に働きかけるんです。毎回手話通訳があります、色々なテーマがありますから、お話し聞きに来てください、と。抱えているだけでは全然動かないので、実際にやってみて、問題にぶち当たる中で解決策を探していくんです。

あと、先ほどのデイサービスでのアーティストレジデンスの話はすごく面白いですね。実は先週まで私の館もアーティストレジデンスをやっている。松本のパフォーミングアーツの人だったんですけど、東京にも住んでいたことがあった人で。美術館開館前の開設準備室に関わった人と会って話を聞くとか、ボランティアの人の話を聞くとか、今の職員と話をするとかで、美術館というものを一つの戯曲にしたらどうなるか、っていう仮説でやるんですよ。

そのアーティストは館内を歩いて、色々な人をつかまえて、対話をし続けるんです。何をやってるか、私たちがよく分からなかったりする。それで今日はこんなことをやった、という滞在日誌をうちのウェブに毎日上げる。そして最後に発表をするのですが、何の事前申込みもない中で120~130人は集まっていたかな。そこでまた色々な話をする。でも全然彼女は体を動かさないで、自分は振付けだけやって、若いダンサーが踊る。1時間半ぐらいのイベントなんだけど、すごく刺激的だったんです。

府中市美術館では、空間を使って何かをする、というのは公開制作でもされてますね。

副会長：

公開制作は、そこに部屋があってやっている。ところでアーティストレジデンスっていう言葉は、どういうこととして定義されてるんですか。

会長：

例えば、食事もできてベッドルームもあり、宿泊できるようなアトリエも整備されていて、そこにアーティストが滞在してやる、っていうスタイルもあれば、さっきの私の話などは、通いなんです。

委員：

私の話したアーティストは、住んです。

副会長：

色々なアーティストいるから、踊る人もいれば、絵を描く人も、版画の人もいる、それぞれに対応するような住居があるということですか。

委員：

ワンルームがあつて、一人、二人ぐらいただつたら泊まれるという場所で、その隣に一応アトリエがあるという感じです。ただアトリエがあるだけで、何かを持ってくるのは自分たちで、ということで、スペースがあるという。

副会長：

アーティストは、こちらから依頼して、無償でそこに滞在していただくのですか。

委員：

それもケース・バイ・ケースです。滞在費を負担する事業もある。

会長：

青森県の、青森公立大学に ACAC という施設があつて、そこは本当に山の中で、すごく環境が良いんですよ。部屋は広めの個室があつて、シャワールームもついている。そしてレジデンスしているアーティストたちが共同で使えるキッチンがあつて、広いアトリエがあつて。日本人もいれば、外国人もいる。私が行ったときは中国人が一人と、日本人がいました。みんな助け合つてやっているみたいです。それでギャラリーもあるんで、成果物を発表するところまで繋げていくんです。

だから、そこでやっているのと割と「閉じられて」いるんだけど、例えばデイサービスでやっていることや美術館でやっていることというのは、むしろ「開いて」いるんですよ。パブリックな空間でやっているということで、色々な人との接点、アーティストが交わっていくということも、結構やりやすい。2時間のワークショップで何かやりましょう、というよりも、もっと面白いことができるかもしれないな、というのはありました。

府中市美術館は「友の会」はあるんですけど。

事務局：

友の会はないです。

会長：

ボランティアさんたちも結構いるんですよ。

事務局：

はい、ボランティアは登録制です。

館長：

ボランティアは、やはりコロナのときに何となく活動が眠ってしまったので、もっと機能する形に、もう一度戻す必要があります。

副会長がさっき、おしゃべりをしていて注意される、とおっしゃっていました。私も実は館長をやりながら、あなたの声がうるさい、と言われたことがあります。

私たちの美術館には、大きな声が聞こえる日があります。1歳児までを対象とした「はじめてアート」というのがありまして。そこで話をしているんです。「赤ちゃんが泣いたときは、それが

主張なんですから、ひるまないでください。もし何か言われたら私を呼んで、あいつが悪いんだ、と言ってくださっても良いですから。」と。

子どもに対して、走っちゃいけないとか、騒いじゃいけないとか言いますが、そうしているわけではなく、「この絵はこうなんですよ」としゃべっていることですから。人に聞こえるようなら「じゃあちょっとボリュームを下げますね」というぐらいで話が済むのであれば、どうぞしゃべってください、と僕は思います。

副会長：

美術館は、図書館のようにしーんと静かな空間だと思い込んでいる方は多いですよ。

館長：

心置きなくしゃべってください。美術館はそういう空間であるべきだと思っております。

副会長：

ある展覧会のオープニングに行きまして、それは芸大の方々の超絶技巧を持ってらっしゃるアーティストたちの合同展だったんですけど、たいてい展示作品の近くに作家さんがいらっしゃるんです。その方たちと話すのも面白い。これはどうやってつくっているんですか、というような話ができるのはすごく良いと思うんですよ。

だから、作者と話せるイベントがあると良いですね。作家の負担にならない範囲で、オンラインのシステムでも良い。絵について聞きたいことがあったら、ぱっとその方が出てきて、分からないことを聞けたりすると、すごく良いなと思います。

会長：

アーティストトークがあると楽しいですよ。

私の美術館は、ボランティアの登録が今400人ぐらいいるんですよ。私たちが目指しているのは、ボランティアの人たちが自分の人生の自己実現のために来てほしい、ということです。自分が楽しんでくれば良いということで、どの作品をどう説明してくれ、というような指示は、私の館のボランティアに何もしていません。

副会長：

ボランティアの資格は何かありますか。

会長：

登録してもらってます。

副会長：

登録だけですか。

会長：

普及担当の学芸員が一人ずつ面談しています。住んでいるところや身元、子どもたちと接する

ことが多いので、そのあたりはきちんとやった上でのことですね。

私の区では、小・中学校合わせて区立の学校が100校ぐらいあって、小学校は60数校ですけど、4年生が全員来るんですよ。中学生は、昔は1年生だけに限定していたんですけど、コロナ禍で来れないかもしれないということで、今は全学年対象にしています。1年に2回ぐらい来れる券を全員に配ってあるので、それで中学生が友達と一緒に来たりしています。夏休み・冬休みに多いので、エントランスホールでボランティアの人たちが待っていて、来館した子どもに声をかけたりしています。

という感じで、登録制度は無いんです。ローテーション表も無い。何月何日にどの学校が何人来る、というと、勝手に集まってくる。管理していたら大変ですから。もし足りなかったら学芸員はみんな出て行って手伝ってます。子どもたち4~5人のグループで、建築が好きなボランティアは建築から、彫刻が好きなボランティアは外の彫刻から、木が好きな人は美術館の敷地にある木の話から入っていくので、順番はバラバラ。そのボランティアさんの個性と子どもたちが出会えば良い、という考え方でやっています。成果なんて後々、20年後に出れば良いよね、というぐらいの考えです。

副会長：

ボランティアの方が活動をした後で、報告を上げたりしていますか。

会長：

反省会は必ずやっています。1日終わると30分くらい。

以前、何かのトークイベントで聞いた話なんですけど、例えばペットボトルのお茶、色々な種類がある中で、お茶Aのコアなファンが大体20%いるとすると、その20%がお茶A全体の売上の80%を支えてるのだそうです。あとの20%はお茶A買ったり、お茶B買ったり、浮動票になるわけです。

街の居酒屋なんかでも、20%の常連が売上の80%を支えてるそうで。調べてみると、20%のファン層が売上の8割を支えているっていうのは、色々な業界に共通しているらしいんです。

そんなふうに、ボランティアの人たちを大事にする、それから友の会の会員さんたちとよく話をして、コミュニケーション取って会員を増やしていく、そしてこの人たちが口コミになって、勝手に僕らの美術館のいいところを外に発信してくれる、と。そういう考え方でやっていくと、友の会もボランティアも年齢層は幅広いので、すごくファン拡充につながる、というのが、これからの時代とても大事だと思うんです。

それから、さっき館長がおっしゃったように、対話をどうするかということですよ。これが文化施設にとって、これからとても大事なことになってくる。展覧会を提供する、見てもらう、という一方通行の関係ではなくて、入り込んできてもらうということ。どこまで入り込んでもらうかということは、また難しいところがあるかもしれませんが、そういうことがすごく大事。

先ほど、おしゃべりの話が出てましたけど、鑑賞教室で小学校60数校が、1年間、5月の連休明けから2月半ばぐらいまでの間で分散して来るわけです。しゃべりながらやっています。10グループぐらいが館内をうろろろして、そうすると文句を言うお客さんがいるんです。監視の係員に、うるさい、こんなんだったらお金返せ、ということをするわけです。

一方で、同じ空間の中には、ボランティアが子どもたちと対話しているのをすごく面白がって聞いている人もいます。そうすると、お客同士がもめるんですよ。子どもたちに対して何てこと言うんだ、と。

なので、何月何日の何時から、何人の児童が入ります、という情報を事前にきちんと出すことにしています。そうすると、聞きたくて来る人もいれば、それを見て来ない人もいます。

事務局：

当館もホームページ上で出しています。

会長：

だから、それは賛否両論あっても、ひるまずにやるしかないです。静かに見たいという人もいるし、私も隣で大きな声で話されると、うるさいと思うこともあります。私はすごく敏感になっているので、自分の声の大きさには気をつけているんですけど、うちの館長なんかも、作品の前で一生懸命説明してしまっ、でも周りの人は分からないから、ちょっとあなたうるさいんですけど、なんて叱られることがありますね。

館長：

私も、たびたびあります。

会長：

どういうふうに会話を楽しむか、というのは難しいところがありますね。

副会長：

キャンペーンみたいに、今回は作品の前で対話を、とか、今日は楽しむ日です、とか、1日でも2日でも掲げていただけると。

館長：

おしゃべりタイムとか。

副会長：

だんだん、しゃべってもいいんだ、という風潮が広がるかもしれませんね。

会長：

赤ちゃん連れのお客様に対する理解というのも、例えば私の館のカフェでは、「赤ちゃんの泣き声、応援しています」というステッカーを貼ったんですよ。そうすると、文句を言いたくてもなかなか言えない。

副会長：

そういうものを打ち出してしまう手はありますね。

私、車椅子の方が、結構混んでる展覧会の際に、大変気の毒だなと思ってます。皆さんが立

って見ていると、遠慮なさってらっしゃるんですね。目線は大体低いし。だから車椅子の方は、優待で、開館時間中でもあるいは閉館後でも、どなたもいないような状況で見られたら良いと思います。特にゴッホとか有名どころの展覧会になると、本当に全然見られないんですよ。

会長：

電動で座面が上がる車椅子があるんですよ。こういう椅子ありますけど乗りますか？と案内すると、8割ぐらいの人が使いますね。

あと、先ほど受付・監視の方々のことで、対面して、出会って、最後お送りするまでの声のかけ方とか言葉遣いとか、ホスピタリティの問題が出てきたと思うんです。今まであがった車椅子の方、視覚障害、聴覚障害、高齢者、あるいはインバウンド、海外のお客様の人権的な問題とか、すごく幅が広がっていて、そういうホスピタリティの問題というのが美術館にとってすごく重要になってきています。受付をなくして券売機にしたほうが楽だよね、みたいな考え方もあるんですが、でも美術館、博物館はそうあってはならないな、という。

どういう人が来るか分からない状況で、有人で人がいてやっていると、車椅子の方にはこういうサービスが必要だ、視覚障害者の方にはこういうサービスが必要だ、ということが、そこで判断できていく。それに応じて館が個々の人に合ったサービスを連携して展開できる、ということがとても重要なのではないのでしょうか。

副会長：

券売機については、私は券を売るのがあったら別に構わないと思うんです。券売機でチケットを買ったとしても、展示室内に人間的な部分っていうのは残してあるなら。

例えば座って見張りをしている方々を、一種のコンシェルジュのような形にして、質問することができたら良いですね。解説してくれ、ということではないのですが、展示作品に対して、ちょっとヒントを与えるようなことが言える人がいてほしい。

会長：

こちらは、監視はどういう人たちがやられているのですか。

事務局

委託業務として行っております。座っているだけのように見えますが、長年の中で様々な積み上げがあって、かなり大きなマニュアルになっています。座っているだけではなくて、むしろ鑑賞の邪魔にならないように体を移したりしています。にらまれているようだというクレームもあるので。また最近ではカメラやスマホでの撮影トラブルから苦情へとつながってしまうことがよくあります。

それらの積み上げができて、結果としては今評判のいい監視業務になっておりますけども、なかなか難しい点は沢山あります。

展示室内での会話の件についても、しゃべらせるな、とか、しゃべらせろ、とかいうことではなく、お話をして誰も差し障りがないなら注意はしない、他のお客様が訴えてきた場合にはお声がけをする、ですとか、臨機応変に対応しています。また、展覧会によっても、全体として子どもたちがワイワイと鑑賞する展覧会もありますが、静謐を必要とする展示の場合にはお声がけ

を強めにするとか、展覧会に合わせて監視業務を調整しています。

子どもたちの鑑賞教室では、作品と1対1で向き合って心の声を自分で聞くということ、作品というのは一人遊びなのだ、というのが原則であって、まずはその行為を勉強してもらい、それができるようになったら、今度は友達と一緒においで、と伝えています。現状は、どこの美術館に行っても大きなお声で話して良い、という状況にはないわけですから、それで叱られてしまっただけはかわいそうなので、世の中の美術館というのはこういうものなんだよ、というのを知ってもらおう。そして、絵と向き合う楽しみを覚えてもらう。その後でみんなで語り合う、という段階で考えてきておりました。

でも将来的には、あまり人と直接話す機会がないということで、もし、語りの場として美術館を捉えるのであれば、今後はより柔軟な形で考えていかなければならないと思いました。

会長：

ありがとうございます。なかなか解決できるものではないですけど、府中市美術館さんは本当によくトレーニングされているというか、工夫されていて。私もやっぱり同業者なので、監視さんの様子や態度をよく見るのですが、歩いていくと自然にずっと後ろ回って、視界からちゃんといなくなる。

副会長：

わざと背中を向けられたりしますよね。でも、そこまで気を遣わなくても良いから、逆に、何かわからないことがあれば聞いてください、という人がいてほしい。

会長：

子どもとか、高齢者、障害者、外国の方など、ホスピタリティの視点で、この府中市美術館が何を拡充していったら良いのか、というのも一つの視点だと思います。色々な要素があるけれど、それぞれが繋がっていくお話ですね。

他に、ボランティアの方たちと一緒に協働してやっていく仕事や、アーティストと来館者が接する、それから美術館と地域の人たちと接する、そういう中で生まれてくる意見とかアイデアが、ハード面ではない改善に繋がり、やがてそれがハード面にも、だったらこういう設備が必要だよ、というふうに繋がっていくのだと思います。

委員さんの人数がたくさんいらっしゃるので、十分にご発言いただけなかったかと思いますが、これで一旦本日は締めさせていただきます、今後は答申書の案を作っていく作業になります。

では、今後のことを事務局のほうからお願いします。

事務局：

今回を含めて、これまで3回の会議の中で、皆様からいろいろご意見をいただきました。これを事務局で整理し、それを踏まえて答申書の草案を作成いただくこととなります。

この草案の作成は、皆様のうちから4名の方によって構成される小委員会で進めさせていただきたいと思います。開催時期は5月以降を予定しています。そして7月頃までに答申書の草案をまとめまして、8月頃に開催する第4回の運営協議会で皆様にお諮りし、ご意見等を反映、修正しながら、9月末までには最終的な答申書としてまとめたく存じます。

小委員会の4名のメンバーについては、会長、副会長のほか、自薦・他薦で2名の方をお願いしたく、この場で選出いただけますでしょうか。

会長：

どなたかご参加いただけますか。

副会長が美術専門で、私も美術館の人間ですので、地域からの選出の方などいかがですか。

副会長：

今期が最後ということで、吉田さん、ぜひいかがでしょうか。

委員：

わかりました。よろしくお願いします。

会長：

よろしくお願いします。あともうお一方。

副会長：

作家さんがよろしいのでは。

会長

金田さん、お忙しいですか。いかがでしょうか。

委員：

はい、よろしくお願いします。

会長：

ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

それでは、議題はこれで終了になります。このあとは事務局のほうにお任せしてよろしいでしょうか。

事務局：

ありがとうございました。先ほどご説明しましたように、小委員会の皆様には答申書の草案の検討をお願いいたします。5月の連休明けから企画展の展示替えの休館期間がありますので、5月下旬以降になろうかと思えますけれども、改めてご案内いたしますので、お集まりいただきたく存じます。

また、最後の4回目の会議は8月頃を考えております。こちらも後日改めて日程の調整させていただきます。

それでは以上で、第3回府中市美術館運営協議会を終了いたします。本日はどうもありがとうございました。